

Title	発刊の辞
Sub Title	
Author	国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の法律学 商事法 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008. ) ,p.i- iii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88453885-00000005--003">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88453885-00000005--003</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 発刊の辞

「継続は力なり」という格言がある。語源は諸説あるようだが、物事の本質と道理をついた見事な名言である。しかし必ずしも継続だけで力が生まれるわけではない。そこには継続を力に変える叡智と努力が必要である。叡智の源は創造的革新であり、努力の源は人間の志である。

今を遡ること一五〇年前の一八五八年（安政五年）、福澤諭吉は江戸の築地鉄砲洲にひとつの小さな蘭学塾を開いた。それが慶應義塾の誕生であった。時に福澤、二四歳であった。その後、蘭学塾は英学塾へと転換し、一八六八年（慶應四年・明治元年）には正式に慶應義塾と命名された。一八九〇年（明治三年）には従来の課程を普通部とし、新たに法学部を発足させ、そこに文学、理財、法律の三科が設置された。ここに慶應義塾大学法学部の前身が誕生したのであった。そして一八九八年（明治三十一年）に政治科が新設され、一九二〇年（大正九年）の大学令により法律科と政治科が合体して現在の法学部の原型が形成された。爾来、八八年、慶應義塾大学法学部は三田の学問と教育を支えるひとつの中心学部として発展してきた。つまり慶應義塾一五〇年の本年、法学部は米寿を迎えたのであった。

慶應義塾大学法学部は一九五八年、慶應義塾創立百年を記念して『慶應義塾創立百年記念論文集』全三冊（法

律学関係、政治学関係、一般教養関係）を刊行した。一九八三年の創立一二五年に際しては、『慶應義塾創立一二五年記念論文集』全七冊（法律学科、政治学科、一般教養関係、法学会・法律学関係、法学会・政治学関係、欧文誌・法律学レビュー、欧文誌・政治学ジャーナル）を刊行した。

そして今年、慶應義塾創立一五〇年を記念して、慶應義塾大学法学部はここに全一二冊の論文集を刊行する。『慶應の法律学』全六冊（公法Ⅰ、公法Ⅱ、刑事法、民事法、商事法、民事手続法）、『慶應の政治学』全五冊（政治・社会、日本政治、政治思想、地域研究、国際政治）、『慶應の教養学』全一冊がそれである。全体で一四〇人の研究者が本企画に参加している。驚くべき数字である。今回、飛躍的に執筆者数が増えたのには理由がある。慶應法学会会員による寄稿者の増加である。このことは、慶應義塾大学法学部がこの間多くの研究者を輩出し、塾内のみならずさまざまな大学や研究機関に優秀な人材を多数供給してきたことの証左である。こうした広範な研究者の活躍のうえに、現在の法学部の発展があることを忘れてはならない。

百年記念論文集の刊行にあたって、当時の前原光雄法学部長は「発刊の辭」のなかで、「この論文集はわが慶應義塾の學問的發展を示すと同時に、法学部の學問的向上と水準を示すものである」と述べている。また、一二年五年記念論文集の刊行にあたって、当時の十時巖周法学部長はその「発刊の辭」のなかで、「法学部は先人の努力と遺産を継承し今日の慶應義塾法学部の現容と學問的水準をさらに広く世界に呈示するに到った」と記し、最後に「法学部の學問・研究の灯火は世代から世代へと、確固として受け継がれていくものと信ずる」と結んでいる。

こうした先人たちの無限の思いをいまここに一五〇年記念論文集全一二冊として再び形にすることができた。本企画に参集した一四〇人の執筆者は慶應義塾大学法学部が生み、あるいは育てた研究者たちである。いうまでもなく、本論文集も今後また一七五年、二百年と続く歴史のなかのひとつの中間報告として相対化されるべきも

のであろう。しかし同時に、これは二〇〇八年の時代精神と学問水準を反映した、そして今の慶應義塾と法学部に対する熱い思いを込めた研究者たちの結晶であることを忘れてはならない。

「継続は力なり」。しかし冒頭に述べたように、継続には叡智と努力が必要である。本論文集が証明したように、現段階の慶應義塾大学法学部はその二つを確実に備えている。今後ともそうした精神を忘れることなく、「無限の生命をもつ法学部」(前原・十時元法学部長)としてわれわれの学府が未来へ向け発展し続けることを祈念したい。

最後に、本論文集の企画・編集・出版の煩雑な作業のすべてを能率的に取り仕切ってくださいました法学研究編集委員会、とりわけ坂原正夫委員長と有末賢編集主任、そして実際の編集作業を担当してくださいました慶應義塾大学出版会編集部に心からのお礼を申し上げる次第である。

二〇〇八年秋

慶應義塾大学

法学部長 国分良成